

第二部「善の研究」 第三編 善

第一章 「行為 上」 第二章 「行為 下」

行為・・・一種の意識を具えた目的のある運動である。その目的が明瞭に意識せられている動作の謂いである。すなわち、有意的動作。(P 165)

行為は、意志と動作。この二者の関係は原因と結果の関係ではなく、むしろ同一物の両面。動作は、意志の表現である。外より動作と見られるものが内より見て、意志であるのである。(P 173)

<はじめに>

「行為は、意識されたる目的より起こる動作。」この言葉は、子どもたちと向き合っていく私にとって大切なフレーズに感じました。

現在、小学校2年生の担任をしています。意欲的で明るい子どもたちから、元気をもらっている毎日です。

元気で明るい反面、問題行動を起こしてしまう子もいます。そんなとき、私はつい、何であんなことをするのか意味がわからない、信じられない、と行為そのものを見て、憤慨し子どもを指導してしまうことがあります。しかし、それを学年主任の先生に話すと、「きっと何か理由があったんだよね。その行為の裏には、必ず理由があるから、そこを考えてあげたいね。」と私を冷静にさせてくれます。その先生の言葉と、今回の「行為」とが重なりました。

問題行動を起こす子のその「行為」に目を向けてしまっていた、いつもの私から、その裏にある「目的」を考えて、行為に秘められたその子の内面と一緒に考えていけるような私になるためのきっかけになるといいなと思い、綴らせていただきます。

< I くん の姿を通して >

一人一人の個性を大切に接していきたい、これは教師としてとても大事なことで、それは重々分かっている、いざ担任として子どもの前に立つと、クラスという輪の中から外れてしまう子が、とても気になり、叱責してしまうことが多く、毎日反省の日々です。

今のクラスに、一年生の頃から問題行動を起こしていて、気になる児童がいます。教室のものを盗んだり友だちのものを隠したり、と信じられない行動をとり、その度に指導していました。学校生活、あらゆる面で指導することが多く、その子と話す=指導という形になっていました。すると、次第にチックの症状が見られるようになりました。

そんな時に、学年主任の先生が「行動の裏には、理由があるから、そこを考えてあげたいね。」と話してくださり、原点に立ち返って考えるきっかけをいただきました。「子どもは、伸びよう伸びようとしている、どんな子でも幸せになりたいと思っている。」とある研修会で教えてもらった言葉を思い出しました。問題行動を起こすこの子だって、伸びよう伸びようとしているんだよな。この子がこの行動を起こす裏には、何があるんだろう・・・と考えると、「ぼくを見て。」というアピールなのかなと感じました。確かに、学校では気になる行動が多くて私に指導されるので、クラスの子どもたちからも注意されることが多く、学校の中で認めてもらうことが少なかったんだなと振り返りました。

そんな中、生活科の授業で外に出て自然の中で遊ぶ活動を通して、その子が生き生きとする時間が増えてきました。一年生の頃から、散歩に出かけると「先生また、行きたい。」と言ってきて、外で過ごす時間が大好きなIくん。

今年近くの湧水で沢がにを見つけ、それを教室で飼うことになりました。すると、朝や休み時間には、水槽から出して手にのせたり教室の中を歩かせてみたりと、沢がにと戯れて遊んでいました。だれよりも沢がにこのことを気にかけて、お父さんに飼い方を聞いたり、濁っている水槽の水替えをしようとしたりと意欲的です。勉強が苦手なIくんの国語や算数の授業では見られない意欲的な姿がそこにはあります。図鑑で、沢がにには隠れ場があると聞いて、家から重たいブロックをもってきました。あまりの重さにビニール袋が破けていましたが、それでもかのために頑張って持ってきてくれたことがわかりました。今までは、よくない行動が目立っていたIくんでしたが、かにお世話を通して、がんばっている姿をクラスの人たちに見てもらえることが多くなりました。すると、最近では大きな問題行動は減ってきて、私にもかわいらしい笑顔を見せてくれることが増えました。この間は、「お父さんが、〇〇ちゃんが好きそうな本を借りてきてねって言ってたから借りてきた。」と小さい妹が喜びそうな本をうれしそうに見せてくれました。今まで、叱ることがIくんと会話のほとんどだったのに、こんな話をIくんの方からしてきてくれることがとてもうれしかったです。そして、最近ではIくんのチック症状もなくなってきました。今まで、Iくんはこんな子、と決めつけて接してしまっていた私を反省しました。その子どもを純粋な心で見ると、とてもかわいらしくて、伸びたいと思っている気持ちがすごくあるんだということが伝わってきました。

「クラス」という枠で捉えてしまうと、どうしてもそれに合わずにはずれた行動をしてしまう子。でも、それは、「クラス」という枠で教師が捉えてしまっているだけで、その枠をとりはらって、一人の子どもとして見ると、なんの問題もなく、純粋な子ども心をもっているんだなと思いました。今回の、レポートを書くにあたり、Iくんへの私の接し方捉え方を改めて反省し、その子の良さを見ていきたいという気持ちが芽生えてきました。「どの子も幸せになりたくないと思っているんだ。」という、根本に立ち返り、問題行動が起こったとき、その裏にある本当の理由を考え子どもと一緒に取り除いていける教師でありたいと思います。